



佐渡を世界遺産に

世界文化遺産登録に向けて

佐渡の金銀山史を彩る人々

○味方与次右衛門

味方与次右衛門は江戸時代前期の有力な山師で、初代は慶長年間(1596～1614)に青盤と呼ばれる間歩を稼いでいたといわれています。その出自は明らかではありませんが、味方但馬守家重の弟とも舎弟とも伝えられています。

初代を引き継いだ2代目与次右衛門は越中国(現富山県)出身で、名を次



▲法輪寺にある味方与次右衛門一族の墓

郎四郎といいました。2代目は初代に引き続き青盤間歩を稼業し、寛永5(7年)(1628～30)頃に大盛りを迎えたといえます。

この青盤間歩の稼業で莫大な収益を得た2代目は、寛永11年(1634)、左沢に大切山間歩と呼ばれる坑道の開発を手がけます。目指す鉱脈にたどり着いたのは正保4年(1647)で、



▲相川下寺町の法輪寺。境内には味方与次右衛門家の墓の他に、水替無宿たちが建立した常夜燈(右)がある。

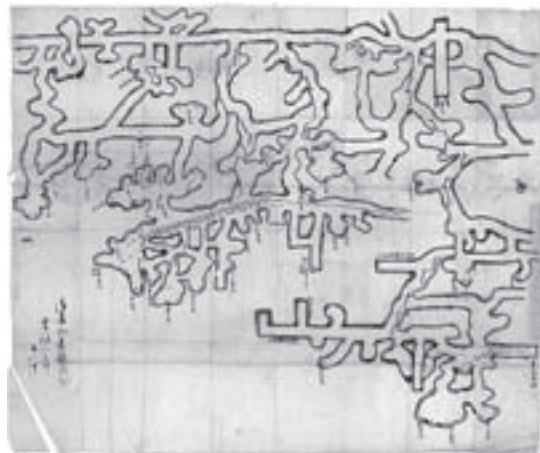


延べ14年もの歳月をかけた大工事でした。この大切山間歩の特徴は、本坑道に平行させて別にもう一本の通気坑道を掘り、両者をとどころ連結させて外からの空気まわりをよくしたことにより、本道158間(約284m)、通気坑道180間(約324m)にも達する佐渡最大の大型坑道でした。2代目は延宝2年(1674)に亡くなりましたが、大切山間歩の開設は公費ではなく全て自費で行ったことから、後の記録には「与次右衛門、殊の外山の事に精を出す」とうたわれています。



▲味方与次右衛門が開設した大切山間歩

3代目以降も山師として佐渡に根付いた与次右衛門一族でしたが、明治に入り、北海道開拓の折に佐渡を離れたといえます。そして現在、与次右衛門の子孫は埼玉県に在住しており、年に一度は菩提寺である相川下寺町の日蓮宗法輪寺を訪れるそうです。境内墓地には与次右衛門一族の墓があり、7基もの巨大な五輪塔が並んでいます。その中には、初代の墓と想定される「元和四年(1618)十二月晦日」の銘がある五輪塔があり、江戸時代に名を轟かせた大山師の名残を今に伝えています。



◀宝暦11年(1761)に描かれた青盤間歩の坑内絵図(ゴールデン佐渡所蔵)

◆教育委員会 世界遺産・文化振興課

☎ 27-4170